

難治性口腔疾患の漢方療法 —多発性口内炎と舌痛症—



山口 孝二郎 先生

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科

1983年 福岡歯科大学 卒業
 1984年 鹿児島大学大学院 歯学研究科 入学
 1988年 同大学歯学部 助手
 1991年 国立都城病院 歯科医長
 1995年 鹿児島大学歯学部 第一口腔外科 病棟医長
 2007年 鹿児島大学病院 口腔顎顔面センター 歯科漢方専門外来

はじめに

口腔、舌に関して黄帝内経には、『脾は口に開竅す』、『心は舌に開竅す』、『腎脈は咽に連なり舌本に係る』、『両頬、齒齦は胃・大腸に属す』と記載され、口腔は経絡を通じて臓腑と密接に関連している。そのため臓腑の異常が口腔に反映することもある。

そこで今回は、多発性の口内炎と舌痛症の臓腑との関連を考慮した漢方治療について紹介する。

症例1 多発性口内炎、口腔カンジダ症

症例：65歳、女性

主訴：多発性の口内炎

現病歴：以前より多発性の口内炎をしばしば認めていたが、6ヵ月前より舌にも多数アフタを認めるようになり、口内炎がなかなか治癒しないため、当科を受診した。

経過：菌検査にて *Candida albicans* と *Candida glabrata* を認めたため、アムホテリシンBの含嗽療法を3週間行ったが、症状があまり改善しないということで自己中断した。しかしその後も症状が不変のため漢方治療を希望し、当科を受診した。

当科受診時の口腔内所見では、多数の難治性のアフタを認めた。

図1に示す漢方的所見から、裏熱燥証（胃熱）と考え白虎加人参湯と桔梗湯（含嗽）を処方した。

2週後にはアフタは軽減した。その後、*Candida* 治療のためミコナゾールゲルを追加併用したところ、4週後には消失し、アフタの発生も認めず、さらに手足のほてり感、手掌発汗、口渇の軽減を認めた。その後も同様の治療を8週間継続したところ、*Candida* の検出はなく、アフタの出現や口渇も認められなくなったので、治療開始から12週目に治療終了とした（図1）。

図1 症例1の口腔内所見

◆漢方診療時



舌色：紅、黄白舌苔(++)、口渇(+)、多飲(+)、手足の火照り(+)、手掌発汗(+)、心下部振水音(+)、体水分量50.9%

◆4週後所見



◆12週後（終診時）所見



本症例のように、口唇内側や頬部に多発し、口臭、口渇、黄色舌苔などを伴う口内炎の場合、胃熱を考へ、清胃瀉火を治療法とすると効果的である。

症例2 舌痛症

症例：42歳、女性

主訴：左側舌縁部のヒリヒリ感

現病歴：以前より体調を崩したとき、左側舌縁部にたびたび疼痛を自覚していたが、自然消退するため放置していた。

数年後、左側舌縁部に疼痛を再度自覚した。さらにその後、近医歯科にて補綴物装着の治療を受けた

ところ、舌痛の範囲が拡大し、補綴物の調整などの治療を継続したが改善しないため、精査加療を目的として当科を紹介され受診した。

経過：初診時所見は図2に示すとおりであり、これらの所見から、気虚、気鬱、血虚、瘀血と判断した。

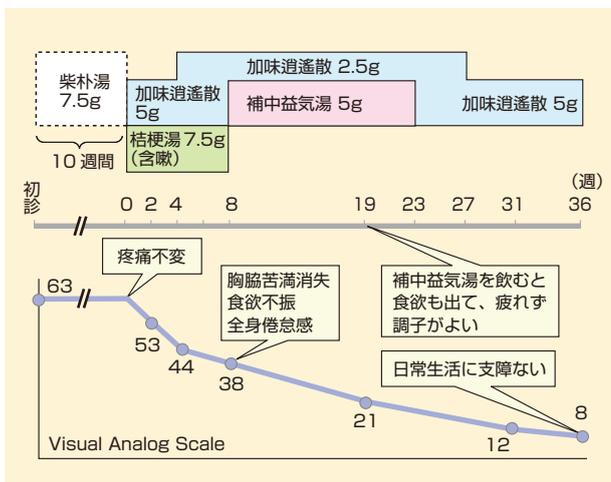
図2 症例2の初診時所見



経過：初診時より10週間は、他の医師より柴朴湯を処方されていたが舌痛が軽減しないため、主治医を交代した。疼痛が不変であったため、加味逍遙散と桔梗湯（含嗽）に変更した。

その結果、VAS値は投与2週後には53、4週後には44に低下した。さらに疼痛の改善を期待して加味逍遙散を増量したところ、8週目にはVAS値は38となり、胸脇苦満は消失した。その後、食欲不振、全身倦怠感を訴えたため、補中益気湯と加味逍遙散とした。19週目にはVAS値は21となり、補中益気湯を服用すると食欲不振、全身倦怠感が改善し調子がよいとのことであった。ところが、23週目より補中益気湯がまずいと訴えがあったため、加味逍遙散単独投与に戻したところ、31週目にVAS値は12、36週目にVAS値は8と日常生活に支障ないレベル

図3 症例2の経過



まで改善したので治療を終了した(図3)。

演者らは、舌痛症患者の口腔内温度を測定し、口腔温(舌背、舌下、両側頬粘膜、口蓋の5ヵ所の平均温度)と舌背温との乖離が小さくなるほど、疼痛が軽減されることを明らかにしている。このようなことから、口腔内温は疼痛軽減の指標の一つになる。また、舌痛症患者は40歳代以降の女性に多発する傾向がある。

まとめ

多発性口内炎のような炎症性疾患の場合、実火、虚火に分けて治療方針を検討するとよい(特に、口臭、口渇、黄色舌苔などを伴う場合、胃熱を考慮清胃瀉火を治療法とするとよい)。

舌痛症の場合、血熱や瘀血も考える必要がある。また、疼痛軽減の指標の一つとして口腔内温の計測は利用価値がある。

難治性口腔疾患の漢方治療のポイントを示す(表)。

表 難治性口腔疾患の漢方治療のポイント

◆多発性口内炎	急性：心火、胃熱、肝火に分けて瀉火 慢性：陰虚、気虚、陽虚、気陰両虚の治療
◆舌痛症	臍腑実熱の舌痛、陰虚火旺の舌痛に分けて考えてみる。 40歳代以降の女性に好発する傾向に留意。

COMMENTS

後山 口腔温を測定されていますが、舌は五臓の熱を反映するのでしょうか。

山口 そのような面もあります。また、舌苔が付着しますと表面温度は下がります。逆に舌苔が少なくなると、口腔温と舌背温との乖離が小さくなり疼痛が軽減されることもあります。

後山 ということは舌苔をよく観察することが重要であるということですね。

峯先生におたずねします。症例1は腎陰虚による熱と考え、六味丸を使用してはいかがでしょうか。

峯 口内炎は炎症であり、まず表の熱をさますため白虎加人参湯は理にかなっています。その後、口内炎がある程度落ち着いた時点で、本治として六味丸が選択肢に入るでしょう。